



2025年2月 診療カレンダー

住所: 東京都中央区日本橋大伝馬町13-8  
メディカルプライム日本橋小伝馬町3階  
TEL:03-3639-3110 FAX:03-3639-3112

2025年3月 診療カレンダー

日	月	火	水	木	金	土
2	3	4	5	6	7	1/8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	

4月から診療時間が変わります！  
ご注意ください

↑ ホームページ

日	月	火	水	木	金	土
2	3	4	5	6	7	1/8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23/30	24/31	25	26	27	28	29

18時最終受付

「今月の言葉」

夜毎、空には神秘的な星の光が輝き、地上には正しく生きることを考え、悩みながら人間が生きている！  
～井上靖～

一般診療	月	火	水	木	金	土	日
10:00-13:00	●	●	●	●	●	●	×
15:30-19:00	×	●	●	●	●	×	×

●9:00-12:30

4月から診療時間が変更となります！！

【変更前】15:30～19:00（火曜日～金曜日）

【変更後】15:00～18:30（火曜日～金曜日）

ご迷惑をおかけいたしますがよろしくお願いいたします。

七帝柔道記

厳しい寒さが続きますが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。寒い夜には、温かい飲み物を片手にじっくりと読書を楽しむのも良いものですね。

皆さまは最近、心に残る一冊に出会いましたか？私は先日、ふと手に取った増田俊也の『七帝柔道記』にすっかり魅了され、その世界に深く引き込まれました。この本は、北海道大学の柔道部での経験を基にした自伝的長編小説で、旧帝大七大学（北大、東北大、東大、名古屋大、京大、阪大、九大）の柔道部による「七帝戦」をテーマに、柔道に青春を捧げた若者たちの過酷で熱い日々を描いた作品です。増田さんは年代的に私の数学年上の世代で、彼の描く札幌の街や北大キャンパスの風景は私が学生時代過ごしたときの情景と重なり、懐かしさとともに当時の記憶が鮮やかに蘇ってきました。

さて「七帝柔道」は、我々がよく知る「講道館柔道」とは全く異なります。七帝柔道は戦前に行われていた「高専柔道」の流れをくむ柔道で、「待て」「場外」がなく、寝技を主体とした競技スタイルです。一本勝ちと引き分けのみで決着がつくため、試合では延々と寝技が続くことも珍しくありません。立ち技中心の講道館柔道では天賦の才能に左右される面がありますが、寝技は練習量に比例して強くなるため、大学から始めた初心者でも、卒業時には有名選手を実力で圧倒することもあるそうです。講道館柔道の創設者・嘉納治五郎は、高専柔道が繰り出す寝技に講道館柔道が惨敗してしまったため、講道館柔道では寝技への引き込みを禁止し、立ち技中心の柔道を確立したそうです。私などはオリンピックで寝技や関節技を繰り返す海外勢に対して「柔道らしくない、投げ技で正々堂々と戦えばいいのに」と思ったりしていましたが、寝技や関節技も日本に以前からある伝統的な柔道で、現在講道館柔道で採用されている技に高専柔道から編み出されたものも多く残っているようです。

それにしても『七帝柔道記』の彼らの練習は苛酷です。七帝戦の試合は15人の団体戦で、勝ったものが勝ち残り、次の人間と戦っていく、いわゆる抜き勝負の試合になります。負けなための戦いが最も重要になり、勝ち残ったものも次で負ければ意味がなくなるため、負けなための技術、体力が必要となります。そのため、練習は熾烈を極めます。立ち技より何倍も辛い寝技の乱取りを延々と繰り返し、餃子のような耳になり、関節技のため関節は亜脱臼を繰り返し、靭帯を切ることも骨折することもあります。当時から連日のハードなトレーニングは無意味であると知られていましたが、そんなことはお構いなしに練習は続き、そこには今でいう「タイパ」や「コスパ」などの概念は皆無です。しかも、このような激しい練習にもかかわらず増田さんたちは七帝戦で最下位を繰り返すという不甲斐なさ、なんとも切ない青春記です。

しかし、大学時代に一つのことに全力を注ぐ姿は、実に気高く、美しいものではないでしょうか。

実は『七帝柔道記』を読むきっかけとなったのは、東大のSさんが描かれていることを知ったからです。『七帝柔道記』は登場人物が全員実在する人物で、本名で描かれています。現徳島大学教授のS先生とは東大の循環器内科で一緒に仕事をしたことがあり、当時から大変優秀な先生として有名でしたが、私のような下っ端の医師に対しても常に敬意をもって接してくださり、人間的にも素晴らしく感銘を受けました。『七帝柔道記』では、S先生は最終学年の6年生でありながら七帝戦に参加し、さらに二人抜きを果たすという偉業を果たしていました。私はS先生が柔道部員だったことは全く知りませんでしたが、なるほど、このような苦しい鍛錬を積み重ねてきたからこそ、医師としてあのような態度と素晴らしいふるまいができていたのだと納得しました。

増田さんたち柔道部員が柔道一色で過ごした苦しく寒い札幌の冬。私もまた、その札幌の冬を知っています。降り続く雪が深く積もり真っ白な世界に覆われた夜、すべてが静まり返る大学構内で雪を踏みしめる足音だけが響くなか、遠くに見えるオーケストラの練習場であるサークル会館の灯りを目指した日々。あの厳寒の北大の冬、増田さんのような熱い柔道の魂を持った学生たちも青春の日々を送っていたのだと思うと何か不思議な縁を感じずにはいられません。彼らが量の上で繰り広げた熱い闘志と、私が楽譜の上に刻んだ旋律は違う世界のものかもしれませんが、同じ雪の下、同じ北の大地で、互いに青春を燃やしていたのだと思うと、感慨深いものがあります。サークル会館の灯りに導かれるように歩いたあの冬の夜の記憶が、彼らの汗と努力に重なり、今になってひとつの物語のように思えてきたのでした。

文責 齋藤 幹